

は無肩組の老人旅館に向
題があり、行政は施設をし
つかりと監督すべきという
認識は定着した。だが、問
題の根本は低所得で独り身
の高齢者が都内で住み続け

支え合い促す 仕組み拡大を

法人・自立支援セミナー



滝脇憲さん

私たちの会では空き家を「簡易宿泊所を丸ごと借りて支援付き住宅」を運営している。職員が常駐して守り、食事や就労など生活全般を支援。地域活動にも参加し、支え合って暮らす

こうした支え合いを促す仕組みが広がれば、膨大な公費で施設を整備しなくても、低コストで効果的な地域包括ケアシステムの社会資源を作ることにつなげられる。広さなど施設基準を厳しくしきると整備の障壁が高まり、かえって居場所を失う人が生まれかねず、慎重に検討すべきだろ

静養ホームたまねぐ火災 20009
年3月19日午後10時半すぎに渋川市北橘町八崎のホームから出火、55・88歳の男女10人の入居者が死亡した。うち7人が東京都の生活保護受給者。施設運営法人（解散）の高桑元理事長は業務上過失致死罪に問われ、13年1月に有罪判決を受けた。判決は、避難に介

東京都の生活保護を受けながら渋川市で暮らす福島県出身の男性。時代物の小説を読むのが楽しみだという。渋川市中郷



たまゆら 10人死亡火災から10年

都内の困窮者 今も県内へ

「身内もいないし、地元で見たら、近くにコンビニがあったので、ここでいいかと思った」。東京都の生活保護を受けながら、7年前から渋川市中郷のサービス付き高齢者住宅で暮らす男性(74)は、入居を決めた理由をこう話す。

福島県郡山市出身。母子家庭で5人きょうだいの末っ子だった。20歳でトランク運転手を経て、東京、トラック運転手を経て建築現場のとび職に。40年余り続けたが、65歳を境に仕事が激減し、貯金も底をついた。住んでいた東京都大田区に生活保護を申請した。

入居者10人が犠牲となつた茨城市の高齢者施設「静養ホームたまゆら」の火災から19日で10年。犠牲者の多くは、東京都の生活保護を受けて暮らす身寄りのない困窮者。そしていまも都内から、群馬を含む地方に困窮者が紹介されてくる。あぶり出された実態は変わつてはいない。

墨田

で倒れた。足が不自由になり、区から今の住宅を紹介された。群馬はトラックで通過したことがあるだけで、訪れたのは初めて。男性は住み心地を「まあ

A black and white photograph of Wang Meng, a Chinese writer. He is seated, facing slightly to the right, with his hands clasped together. He has dark hair and is wearing a light-colored, long-sleeved shirt. The background is bright and slightly overexposed, showing what appears to be a window or a bright outdoor area.

自身の人生や取り組みを原稿にまとめたという高桑玉郎・元理事長=前橋市

火災時の運営法人理事長

高齢弱者の住まい 「本気で取り組みを

「私の存在が周囲を害され、迷惑を及ぼした。責任私一人にある」と、静養院は自身で大口仕事などを断らなかつた。入居者が増えすぎて介護に手が回らず、施設を広げるための増改築は、自らの責任として認められなかつた。

桑五郎元理事長(94)は語る
「高齢弱者救済を標榜し
火災後は近親者の支援を
策もおろそかになり、惨事
につながった。

暮らしたが、それも難しくなり、昨年3月から生活保護を受給する。家賃月1万8千円の前橋市内のアパートで1人で暮らし、家族も音信不通だ。外出は通うくらいという。

高桑氏。「ほとんどの施設はお金がないと入れない。高齢低所得者の住まいは重い課題が突きつけられたままで。国や自治体に本気で取り組んでもらいたい」と話す。19日には、高崎市内にある慰靈碑を訪れ、冥品を

立場に立たず、心から感謝する。次第に、
生活保護受給者が主な入
者となっていました。
深く刻まれている記憶
、行き場のない人たちの
だ。都内で受け入れを拒
られた高齢者を伴った親族
役所の職員と訪れて「本
に預かってくれるのです
」と懇願してきたり、障
のある高齢者を連れてき
親族が「縁切りだ」と言
残して去つたり。
要望されば受け入れを
と見守る。(上田学)